

るが故に尊しとする人は何でもかんでも俳句で片付けてしまふ、しまはうとする。一つの花を我々が芸術に創作しやうとする。それを絵としてか、俳句としてか、歌としてか、小説としてか、それは、その折の心持にも依らうが、結局はその人の能力の傾向に依つて、俳句となり絵ともならう。かくして季題寸言も創られる。俳句がいか季題寸言が劣るか、それを断ずる勇氣を僕は幸にも持たない。

「俳句より字数が多い」云々は、真地面に季題寸言を育て、行かうとしてゐる作者達を怒らせるだらう。誰が字あまり俳句を作る気で投稿したか、さういふのを「毎度見受ける」といはれるが、僕はどれを指されるのか受取りかねる。例をあげて海紅の句と並べて評されたい。海紅はこの四、五年來僕は知らない。よし海紅に沢山い、句があらうと、それで何して季題寸言が悪い事になるか。海紅の句は海紅の句、季題寸言は季題寸言である。作者も選者も真地面に苦しんで育てはじめてゐる処だ。字数や上面の感で簡単に片附けられたくない。僕は現在以上の如く信ずる。

(大正12年)

季題寸言

片脚曲らない男が、月夜の籐椅子で、化物のやうな大南瓜を盗む話をした。たゞそれだけなんだが——。

(南瓜)

ついとろく／＼としたと思つて驚いて眼をさましたら、頭の後ろが痛かった。茶筒を枕にしていたのだつた。何となく肌さむく、膏葉の匂いのなつかしい梅雨の日の午前だ。

(梅雨)

洗ひたてのシートに取換ると、いつも病院がなつかしい。白湯でのむ粉薬、夕暮の庭に咲いた山梔子、午前の看護婦達——。(六月)

「誰れ彼れ曰」

(曲水817)

(此欄大いに投稿を乞ふ。但取捨の権は編集者にあり。又変名の稿は没書とす。)

南崖曰(要約)

再び、感情を交へない純なる芸術論として、私の季題寸言觀を述べる。今かりに、寿司の味は和歌、蕎麦の味を俳句とすると、季題寸言の味も蕎麦である。但し俳句には本場の味があり、寸言は場違ひの味だ。曲水は俳句誌であつて、誌友は作句することとそこに帰依しているのだ。寸言の多少変つた味は俳句で必ず出せる味であり、寸言が抱く内容は必ず俳句に表現できると断言する。俳句に専念しその醍醐味に到達せよと言ふのだ。

左記、海紅の句は、い、句として、はなく、寸言と行き方が同じだと言ふことを示すために抜いた。

●二人が背を見せて苺畑にゐる

(一碧樓)

●わたしの句の曼珠沙華から曼珠沙華の薺を見に來たりした

(鶉平)

●つばくらめがしろいはらを見せに來た

(同)

●けふのわたしのきものから蟻がしましうほどに働いた

(同)

●労働者になりきれないで目刺を食ひ目刺の頭をすてた

(椰子樹)

●菜の花畑の小道が畑と同じ土の色

(痴堂)

* * *

長頸子曰——あの辺の処が感情に馳つてみたやうに取られた

のは、僕の筆触の粗暴から來た処だろうと恐れ入りますね。今月のあなたは「純なる芸術論」と言はれるが、一体あなたは季題寸言